

崔書勉先生と私 『いま寂寥を覚えるならば』

日韓談話室代表世話人 共同通信社社友 橋本 明

一九七四（昭和四十九）年秋、文藝春秋本誌は気鋭の書き手二人による労作「田中角栄研究」を掲載した。綿密な資料分析は日本のジャーナリズムにおける調査報道のはしりとされ、新聞各紙が追い、田中個人の崩壊を招いた。同じ号に「征韓論を排す」という一文も載る。八月十五日韓国光復節当日、大阪の在日韓国人文世光によって実行された朴正熙大統領夫人陸英修暗殺事件前後の韓国社会を描いた内容だ。筆者は橋本明、私自身である。

共同通信社編集局が外信部を中心に騒然となった当時、私は社会部デスクだった。覗いてみると水藤真樹太記者がぼやいている。「韓国査証が取れないんですよ、なんとかありませんかね」

思い出した人物がいる。藤島泰輔、学習院中等科以来の級友で作家。「この日本に凄い韓国人がいるのを知ってるか。陰の駐日韓国大使とさえいわれている実力者だ」と言っていたではないか。早速電話を入れる。幸い在宅だった。事情を話したところ、「すぐ行くこう、オレが貴様を紹介する」と言う。

ロシア大使館北側路地を入った左手に東京韓国研究院の看板をぶら下げた木造三階建ての洋館があり、院長である崔書勉博士は二人を迎えた。大柄なからだに大きめな顔。豊かな長髪を掻き揚げ「う、何枚ほしいの、二枚か」。初めて崔さんと会った瞬間だった。

一報その他は共同ソウル支局長が処理している。国葬が行われる数日前に私と水藤記者は悠然とソウルに入った。崔さんの親切は単にビザを取得させてくれただけではなかった。なんと滞在先ホテルの電話が鳴った。受話器を耳に当てると、「崔書勉です。下に来てから降りていらっしやい」とおっしゃるではないか。

崔さんは乗ってきた車に私たちを乗せ、殺害現場となった国立劇場に連れて行ってくださった。「ハングルでは困るだろうから、飛んできた」意表を突く行動力と徹底した思索に心底びっくりしたものである。朴大統領の長女権恵

は西江大電子工学科からフランスに留学中だったが急遽帰国、その後父親が金載圭に殺害された一九七九年までフリスト・レイディを務める。葬儀に臨んだ姿を遠望したが、幼さが残る痛々しい様子はいまに焼きついている。

いま、崔さんは淋しそうだ。日本でも韓国でも親しかつた友人知人のほとんどが鬼籍に入ってしまった、語る相手に事欠くありさまである。二〇一二年春、東京で開かれた崔書勉先生を囲む日韓談話室では、三途の川にかかる橋を渡っているとき、とつくに死んだはずの友人に出会った話を披露された。「おまえも死んだんだ」といわれてにわかにはっとしたのだろう、橋を戻って俗世に生還を果たしたという語りを聞いていて、巨人の胸奥に黒々とあいた空洞を見詰めた感であった。

どうか、お好きな日本でずっとずっと余生を楽しんでいただきたい。当会は急逝した小河原日韓協力委員会専務理事の遺徳を偲んで崔さんが「みんなが集まり、彼を偲ぼう」と発言して成立した会である。爾来、一人として亡くなった仲間はいない。元氣虫の私たちであればこそ、崔さんに不自由をかけることはあるまい。